

# 新研究方法論1

研究の必要性

木村 朗

# 問

- 理学療法はすべて、自ら担うべき(果たすべき)責任において、患者さんの問題に答えられているか(かなり高い満足を提供できているかー理学療法を利用することで利益が生じているか)？

答え

- No

# 先の答えの理由

- 理学療法士のばらつきが大きく、治療技術が標準化されたとしても、様々な患者のバックグラウンドに応じた最適な理学療法を科学的に（あるいは現在考えられる最も合理的な）説明ができているとは思えない。
- 開業権もなく、むしろ競争が働かない世界で安住できる仕事のように日本では考えられている。

- エビデンスベースドPTという言葉は、その意味は知っていても、利用することでどれくらい威力があるか、知っているPTは日本では少ない。

- 解決方法が未知なる困りごとへの対処は、研究するしか方法がない。
- にも拘わらず、過去のどうにもならない治療法を延々と覚え、試験で満点を取ったとしても、あなたの成績が、必ずしも、未知の困りごとの解決に結びつかないことがわかるだろう。

- 研究が必要な理由は
- 患者の困りごとで、未だに解決できないことを試行錯誤や実験や情報収集によって(これを研究という)解決する努力をするのがプロフェッショナルとみなされる人であり、PTがプロフェッショナルであり続けるためには、研究こそがもっとも有効な手段だから。

- 学校の勉強を一生懸命行ってよい試験の得点を重ねるのは、あくまで自分のためになる行為であり、未知の困りごととは関係ない。



- この未知の困りごとの解決を試みる姿勢こそ、リハビリテーション・マインドと呼ばれるものである。

このマインドを持つためには、困りごとを真摯に聞き取り、観察し、そのニーズを探る以外にない。